



センター通信

発行: 逗子文化プラザ市民交流センター(2019年10月1日 vol.110)

NEWS 最新のお知らせ

ソーシャルビジネス講座

旅するように働く ~ひとつの雇用に縛られない働き方~

兼業、副業、複業など、特定の雇用に縛られない働き方が浸透してきています。民間の企業で身につけたスキルに磨きをかけ、被災地支援やNPOでの活動しながらキャリアを積み、現在はフリーランスで「旅するように働く」宮本裕子さんにお話を伺い、ライフスタイルにあった多様な働き方を見つけます。

日時: 2019年10月18日(金) 18:30~20:30 (開場 18:15~)

定員: 先着30名 ※定員に達した場合はキャンセル待ちとなります。

費用: 500円



講師: 宮本裕子氏

オランダとつながるアートワークショップ

オランダ在住の日本人アーティスト嶋野ゴロー氏とインターネット中継をしながら行う、みつろうクレヨンを使ったワークショップです。みつろうクレヨンで画用紙をぬりつぶし、その上を削りながら描くスクラッチング手法。今回はゴロー氏の指導によるモチーフを目立たせる工夫などもお教えます。



逗子のみなさん



オランダのゴローさん

開催日 2019年10月19日(土)

時間 ①11:30~12:30 (受付 11:15~) ②14:00~15:30 (受付 13:45~)

定員 ①小学生10人+保護者(先着) ②中学生以上20人(先着)

※定員に達した場合はキャンセル待ちとなります。

料金 1キット 1000円

持ち物 シャープペンシル・カッター・ナイフなど削る道具

講師 嶋野ゴローさん、長峰宏治さん(CAMWACCA)

各講座の
お申込み・お問合せ

お申込み受付 10月2日(水) 9:00から市民交流センター窓口および電話・FAX・メールで受付
お問合せ TEL: 046-872-3001 FAX: 046-872-3003 E-MAIL: ac-center@zushi-psc.org



講座ふりかえり



親子講座

せがいにひとつ

じぶんだけのエコバッグをつくろう

開催日時 2019年8月25日(日) ①11:00~12:00 ②14:00~15:00

参加者数 ①4組7名 ②3組4名

講師 長峰宏治氏 (CAMWACCA)

受講満足度 5.0点中4.88点

はちみつで作られたクレヨンを使用することにより自然環境に対して興味を持つきっかけ作りを目的とした親子で参加するワークショップを行いました。ハチの巣の材料であるみつろうの話、みつばちの自然界における役割などの話を聞き、色付けした上に黒く塗りつぶした台紙を先のとがったもので削り下の色を浮かび上がらせる「スクラッチング」を体験！その後いよいよエコバッグの制作に取り掛かります。親子で自由に絵を描きそれをアイロンで定着させて仕上げていきます。子どもはもちろんおともも夢中で取り組む様子が楽しそう。その甲斐あってそれぞれ独特の風合いのすてきなエコバッグができあがりました。アンケートの中には「日常で使用するものに今しか描けない子供の絵を使う形で残すことができたのはよかった」などみなさん満足された感想が多くよせられ満足度の高い講座になりました。



tomoiku

逗子トモイクフェスティバル企画者募集!

2020年3月21日(土)・22日(日)開催予定 テーマは「逗子再発見」

「逗子トモイクフェスティバル」の展示企画者を募集いたします。詳細は以下のとおりです。

内容をご確認の上別紙申込書に必要事項をご記入の上、ご応募ください。

■逗子トモイクフェスティバルとは…

共育をキーワードに、世代を超えた地域コミュニティの活性化と、地域間交流を通じて「共に学び、共に育つ町」をみんなでデザインし、表現するイベントです。コンサート、ワークショップ、講演会、発表会、映画会、作品展示、ショップなど様々な企画を予定しています。今回のテーマは、「逗子再発見」です。

みなさまが愛する町逗子の魅力を再発見できるようなイベントを目指します。

■応募資格：逗子トモイクフェスティバルの趣旨、企画に関する基本ルールに賛同いただける団体・個人主催者と Email での連絡ができる団体・個人

■応募方法：申込用紙に必要事項を記入しメールか FAX で応募してください。

申込用紙は「募集要項」と共に、逗子文化プラザ市民交流センター受付に置いてあります。メールまたは FAX での申込みができない場合は、逗子文化プラザ市民交流センター受付へ応募用紙を封筒に入れ封をして提出してください。

■応募締切：2019年10月25日(金)

※企画に応募されたみなさんには、選考結果を11月中頃までにご連絡いたします。

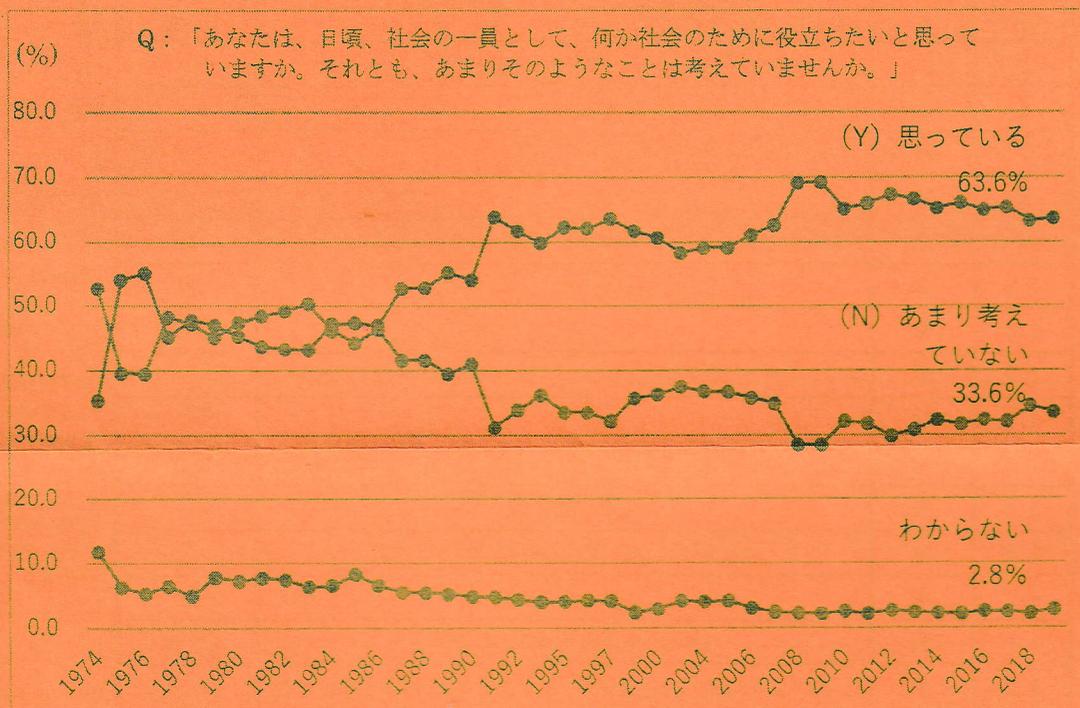


昨年の会議室での様子



昨年のホールでの様子

「社会意識に関する世論調査」



(調査期間：平成 31 年 1 月 24 日～2 月 10 日) 内閣府

ナルシシズムからの脱出

NPOCLIP vol.48



仕事柄、市民活動やボランティア活動にまつわる相談を受けることが多い。といっても、20 年前にできた NPO 法をきっかけに急激に増えるであろう市民の自主的な活動組織の動きができるだけスムーズに進めることのできるように、情報を集め、過去の地域活動や社会教育活動の経験と照らし合わせ構築した、「持論」の押し付けになっている感否めない。正解があるようでない世界とも感じている。

セミナーの講師としてのお声掛けもいただき、無数にある国民の意識調査や世論調査のデータから読み取れることも伝えている。そんな中で、いつも話題にしている資料がある。「社会意識に関する世論調査 (内閣府)」は

1974 年からほぼ毎年行われているもので、「日頃、社会の一員として、何か社会のために役立ちたいと思っていますか」という問いに対する答え「思っている (Y)」と「あまり考えていない (N)」の比率である。昭和の時代までは (Y) と (N) は交錯し、一定の法則は見受けられないが、元号が平成に代わる前後、つまりバブル崩壊 (1980 年代後半) 後の「失われた 10 年」といわれた時代に (Y) が 50% を超え、1990 年には (Y) は 60% を一気に超えている。その後、(Y) は微増しており、70% に届こうとしたタイミングは、リーマンショック直後の 2008 年であった。経済的な価値を求めて走っては、壁にぶつかり、社会的な価値の大切さに気付く。というサイクルを繰り返しながら、国民性がつくられてきているように感じている。上記の調査では、ここ 10 年の傾向として、(Y) は、徐々に微減している。やはり世の中は経済的な価値指標で動き、つまずきそうになった時、「いやいやそれだけではなかったはず。」となるのか。だからと言って、自分以外の誰かのための行動を起こせる人、起こす環境にある人の数はそう多くはない。「いやいやそれだけではなかったはず。」と思った人たちへ何を伝えたらよいか、自問自答が続く日々を過ごしている。(Te)

